
2021 年 **3** 月

真宗大谷派 京都教区 教化広報誌

教区だより

特別号

Vol.11

「今、この時に、親鸞聖人に会う」

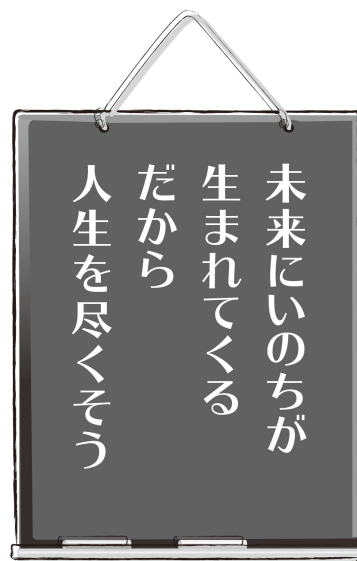
いっさいくく いさだいあん
「一切恐懼 為作大安」

仙台教区気仙組西法寺 木ノ下 秀俊氏

◎『教区だより』特別号 について

新型コロナウイルスの感染拡大の影響により、『教区だより』は通常の編集体制が取れなくなったため、5月より京都教務所の編集責任により、「特別号」を発行しております。

通常の体制に戻るまでの間、引き続き特別号というかたちで発行してまいりますので、教区の皆様には、ご理解いただきますようお願いいたします。



※毎月掲載しております、「ことば」は、教区駐在教導が担当しています。

『教区だより』特別号の発行について

新型コロナウイルスの猛威が世界中を不安に陥れ、私たちの日本社会も計り知れない不安の只中にあります。

これまで「当たり前」にしていたことが当たり前ではなくなった現実に向かい、あらためて考えさせられること、気づかされることも多々あるのではないかと思います。

私たちが当たり前にしてきた「日常」とは、実はどこにも約束されていない奇跡の連続であり、また人間の自我分別が思い描く理想は、常に事実の前に屈服せざるを得ないという道理も教えられます。

いま、私たちは早期の事態終息を深く願いながらも、このような時だからこそ、浄土真実を宗とする宗祖親鸞聖人の教えに身をさらし、聖人の教えに出会い直していくことが大切ではないかと思っています。

このような願いから、京都教務所では「今、この時に、親鸞聖人に会う」というテーマのもと、『教区だより』特別号を発行してまいります。

京都教区教化委員長 日野 隆文

「今、この時に、親鸞聖人に会う」

「一切恐懼 為作大安」

仙台教区気仙組西法寺 木ノ下 秀俊

今、この時

震災九年目の春は新型コロナウイルス感染症の蔓延のため東日本大震災の記憶を掘り起こすことも少なく過ぎた。外出を控えテレビニュースを観る毎日、震災の時も被災地以外で多くの人は同様だったのかもしれない。緊急事態宣言が発出されるに至り、あらためて未だに原子力緊急事態宣言下を生きていたことを思いだした。あの時、爆発する原子力発電所の映像とともに襲いかかってきた恐怖と不安がよみがえる。錯綜する情報の中で右往左往していた日々はどこへいつてしまったのか。

画面に映し出された国内外の街は震災の時のような混乱はないものの、静まりかえり、途絶える人の流れは昨日までとは全く違う世界に見えた。放射能とウイルス、恐怖の対象は違えどこの緊張感は同じものだ。人間の五感では感じる事ができないものに對する恐怖と不安。これが放射線被曝とウイルス感染との第一の共通点である。

しかし、今回のウイルス感染のほうがより深刻に思える。放射線被曝については、事故直後とりあえず原子力発電所から距離をとることで安全は担保で

きた。だから地域を限定した住民の避難ということにもなった。その後も環境を汚染している放射性物質や空間に漂う放射性物質は測定することができた。それによってどこに危険があるのか、その脅威の度合いさえリアルタイムに数値化し可視化することができた。

対してウイルスは人から人へと伝搬していく。今となつては世界中どこにその脅威があるか知りようがない。身近に感染者が確認されて突然その脅威を知る。これは放射線被曝ではなかったことだ。人の集まる場所、葬儀場へ行つてさえも駐車場に並ぶ車の都道府県表示が気になる。何処に鬼がいるかわからない、気がつけば自分が鬼になっているかもしれない鬼ごっこを一年間続けてきたかのようである。疑心暗鬼の生活で疲れ果ててしまっている。

第二に当初から国がきちんと調査をしなかった点もよく似ている。国は子どもたちの甲状腺被ばく線量を測定していた研究者に中止を要請した。理由は住民を不安にさせないためであったが、それはかつて不安を増大させた。その後始まった子どもたちの甲状腺検査も小児甲状腺がんの発見数が増えるに至つて、検査をすれば小児甲状腺がんの子どもたちが増えるので検査そのものを中止すべきという理解しがたいことを主張する人たちが現れる。今回もコロナウイルスのPCR検査を増やせば感染者が増えるという主張をする人たちがいる。東京都は積極的

疫学調査の対象を絞ることにした。何のためかと言えば保健所や医療施設のオーバーフローを防ぐのだという。それに対し住民への一斉PCR検査を表明した広島県は検査によって「感染者が『増える』のではなく、すでに感染している方が見つかるもの」「早めに拡大の芽を摘み取ることで、中長期的にはトータルの感染者数を減らすことができる」と明解にその意義に言及している。

第三に感染症対策と経済対策を天秤にかけているところもよく似ている。「命か金か」という究極の問いも原発事故後の世論動向と同じだ。陥るのはいつもココだ。どちらが大事ではなくてどちらも大事だという事は皆分かっているはず。二元論は悪戯(いたづら)に断を生み出すだけである。「Go To Eat キャンペーン」は「福島の農産物食べて応援」の焼き直しに思えるのは私だけだろうか。これはかつて辿った道である。気がつけば再び災害の渦中にある、これが私の生きる「今・という時」である。

諦(あきら)みに観る眼

災害時に人間は目の前のはっきりした危機よりも、遠くのぼやけた希望にすがりたくなる傾向がある。危機を目の当たりにして思考の限界に突き当たるのだ。だから根拠のない樂觀主義に依りすがり現実から逃避しようとする。原発事故の時には「ただちに健康に影響はない」「六十歳以上には影響ない」「ア

ンダーコントロール」という言葉。今なら「日本は医療が発達しているし諸外国に比べて感染者も死亡者も少ない」「子どもや若い人はかかりにくい」「感染しても百人中四人の死者に自分にならないだろう」等々、災害時正常性バイアス(自分にだけは非常事態はおきるはずがないという思い込み)による樂觀的な希望はいつしか根拠のない確信と成り果てる。結果、疑心暗鬼と根拠のない樂觀論が世界中いたるところで争うことになり、人びとが力を合わせなければならぬ肝心なこの時に断断を生み出してしまふ。怪しげなシャーマンや陰謀論者がこの時を待っていたかのように世界中を席捲(しやくけん)しているのは危機の中で人が依りすぎるものを求めているからに違いない。

コロナウイルスは存在しない、マスクは必要ないという人も、マスクを強要する人もただ安心したいだけなのだ。けれどもそのために何が本当で何が嘘なのか分からない現状にあつて人は自分の都合に合えば嘘でも本当にしようとする。これはまさに災害時のパニック状態、仏教で言えば「迷い」である。今この時に必要なのはどんなに不都合な事実であっても、諦に観さだめて認め受け入れる勇気ではないだろうか。

天命に安んじて人事を尽くす

歌人と謝野晶子はスペイン風邪の流行で大勢の死

者がでる中で「何よりも人事をつくして天命を待とうと思つています」と書いた。結果はどうあれ最善を尽くすということだが、それは結果がでるまで恐怖と不安の持続を意味する。その恐怖については「本當に怖いのは、その病気ではなくて、病気に怯える人間が怖い」とも書いている。仏教はウイルスを退治することはできないけれど、問題が恐怖と不安ならば話は別だ。それは仏教が向き合い続けてきたことだからである。

こんな逸話が伝えられている。一休禪師は最期の時に「本當に困ったとき、これを開けよ」と弟子たちに箱を遺した。その後、寺が窮地となり弟子たちはどうにもならない状況になって、その箱を開けてみると、「大丈夫、心配するな、何とかなる」と書かれた手紙が入っていた。追い詰められて憔悴(せうすい)した弟子たちも思わず笑ってしまったという。弟子たちは禪師の遺したこの言葉によってパニックから醒め、人事を尽くして問題を解決した。同様に蓮如上人が疫病(えびい)の御文で先ず「疫病によりてはじめて死するにあらざる。生まれはじめしよりしてさだまれる定業なり」と説き、「われを一心にたのまん衆生をば、かならずすくうべし」と続けたのも、まさに疫災の中にあつて「安んじて人事を尽くせ」の勧めである。

災害パニックから醒めて油断も過信もせずに自分が出れることをするしかない。これも原発事故後の生活と共通である。

教務所からのお知らせ

《敬弔》

ご生前のご功労を偲び、謹んで哀悼の意を表します。

近江第八組 本誓寺前住職	野田 宣雄
二〇二〇年十二月二十九日	八十七歳
近江第二十六組 本福寺前住職	武田 昭
二〇二〇年十月二十二日	九十一歳
若狭第一組 眞宗寺坊守	眞木 妙子
二〇二二年一月十三日	七十一歳

【敬称略】

《京都教区得度学習会について》

期 間 二〇二二年三月三十日・三十一日

※三十一日午後より得度審査を行います。

講 師 教区教化委員、本山本願部堂衆

対象者 二〇二二年五月以降に得度式の受式を予定されている方。

申込み 三月十一日（木）までに、参加申込書を京都教務所にご提出ください。

※詳細は、開催案内を参照ください。

《京都教区ホームページ動画について》

法話動画をお探しの際は、京都教区ホームページ「ホーム」画面の下方にある検索バーに「法話」もしくは「動画」と入力して検索ください。

または YouTube のサイトにアクセスいただき、「京都教区」と入力して検索ください。

また、随時教区内の情報を更新しておりますので、「お気に入り」にご登録ください。各種申請用紙もダウンロードできますので、印刷してご利用ください。

《いま、あなたに届けたい法話Ⅲ》

慶讃テーマである「南無阿彌陀仏人と生まれたことの意味をたずねていこう」を共通テーマにした法話動画がしんらん交流館ホームページにて公開されています。

今回は乾文雄氏（京都教区正念寺住職・大谷中学高等学校講師）による法話がアップロードされています。講題は「わたしを立ち止まらせるもの」です。

インターネット配信用に収録した短い法話（約20分）となっております。ぜひ視聴ください。

<https://jodo-shinshu.info/2021/02/10/28048/>

検索

法話

SEARCH

駐在日記

朝起きればキューピーちゃんが横たわっている。我が家でしばしば見られる光景である。乾燥肌に加えアレルギー体質である 5 歳の息子は、真冬であるにも関わらず、気がつけば全裸になっている。寝ている間に身体が痒くなり、服を脱いでしまうようだ▼コロナウイルス感染症の影響もあり、できる限り病院は控え、保湿クリームで対応していたが、花粉の影響なのか鼻炎の症状も見られるようになったので診てもらうことにした。訪れた病院の医師がアレルギー専門医であったため、アレルギー検査を実施。採血の痛さで騒いでしまうのではないかと懸念をよそに、当の本人は貼られた止血シールの絵柄が気に入らないと騒いでいた▼数日後、検査結果が出た。花粉症ではなかったようだが、ハウスダストの項目に☆一つ、犬の項目にはなんと☆三つ。そういえば帰省した際、飼い犬の熊五郎小助（トイプードル）に顔中を舐められ、程なく顔がボコボコに腫れ上がったことがあった。自然と治まったが、痒さでのたうち回る姿に肝を冷やしたことを思い出す▼通年性アレルギー性鼻炎ということだが、アレルゲンを少量から投与し、体を慣らし、長期にわたって症状をおさえる治療法があるそうだ。今後の長期通院を説得すべく、じゃれ合いの中、私の髭面で頬ずり。すると次第に息子の顔に蕁麻疹のようなものが発出…。私の髭は☆二つ分くらいあるのかもしれない。（駐在教導 佐々木大）

真宗大谷派 京都教区 教化広報誌

「教区だより」 特別号 Vol. 11

発行人 日野 隆文（真宗大谷派京都教務所長）

発行所 真宗大谷派京都教務所

〒600-8164 京都市下京区花屋町通烏丸西入

Tel : 075 (351) 5260 Fax : 075 (351) 5256

発行日 2021（令和3）年3月1日

メールアドレス : kyoto@higashihonganji.or.jp

真宗大谷派京都教区ホームページ

京都教務所

検索

